第 5 号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341

七人の仲間と彼岸

仲間が一人が逝った
皆が　あいつは病弱だったでな!!
よう　ここまで生きてきたわ　といった
次に仲間が一人逝った
皆がいった
もう五年ほど生きていて欲しかった　と
次に仲間が二人逝った
残った三人がいった
いよいよだなー　ここまできたからまあいいか!!と
次に仲間が一人逝った
残った二人のうち一人は寝たきりだ
どうか　こうが　の一人が　真夜中に呟いていた
彼岸(むこう)がにぎやかだな!!
語るべき　友はいない
やかましかった女房が逝って三年にもなるし
一人だ　一人だ
　俺はたった一人だ
明方ころ　涙がでてきた
ナムアミダ仏　ナムアミダ仏
くりかえしている

聖人のおことば

浄土真宗に帰すれども
真実の心はありがたし
虚假不実のわが身にて
清浄の心もさらになし

『已上十六首これは愚禿がかなしみなげきにして述懐としたり。この世の本寺本山のいみじき僧ともうすも法師ともうすも　うきことなり』法然上人の案内によって念仏の道に入ったのは三十代そこそこであった。凡夫往生の道は念仏しかない。

信念としてこの事は出来ていたはずなのに八十才をこえた今も不安が湧いてくる。仏を信ずる心もにごっているし凡夫といいながらも世間の風評や知識にこだわってばかりいる我が身でもある。

人間の心とは一体どんなものなのか皆目わからなくなってくる。

この章の五首目

小慈小悲もなき身にて
有情利益はおもうまじ
如来の願船いまさずは
苦海をいかでかわたるべき

親鸞聖人は悲歎にくれながらも

さらに勇気を出して仏を信ぜよと……

これしか方法がないのだからと

K家の宝松

日本人にとって松は庭木の王者である。その姿は多様で見ごたえがある。日本の風景は松なしでは語ることは出来ぬ。年始の松竹梅からカルタの一月も全て松からはじまる。

その松が最近の日本人から敬遠されだした。経済第一主義にもとづいて庭から撤去されだした。さらに庭も枯山水は埋められて鉢うえ式の草花がとってかわっている。

宝松は八十年前も、今も変わらぬ姿をしている。毎年毎年同じ庭師さんによって整枝されているからである。このK家にはおいしい井戸水があった。いつもポクポクと湧出していた。この水は宝松の東にちょっとした池をつくっていた。

その池に咲いていた河骨の花が未だにわすれられない。

お宮さんの犬

ゆっくり〳〵露地を自転車でやってきた時一匹の犬にであった。

その犬は一瞬たちどまったが、ゆっくりと進んで来て自転車の私とすれちがった。道幅一杯にその犬は距離をとり私をさけるようであった。

みれば乳房がえらくたれさがっている。私は子育て中かと思い、その犬が野良犬に近い様子に同情心をもった。

後日この犬はお宮にすみついた夫婦犬で数人の方々が食事をあたえていることを知った。産んだ仔犬を世話している方もでてきた。

この犬は愛情を受ける資格があると自分にいいきかせた。

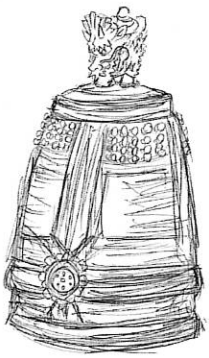
今の世の日本人もたまにはつつましく静かに生活してみてはと思った。

稚児募集

廣讃寺　親鸞聖人七百五拾回
御遠忌(待)法要

十一月三日(祝)　午後一時

～仏の子として　わが子を
かざり　育てましょう

※九月案内

九月　六　日(土)　学習会
九月十三日(土)　同朋委員会・例会
九月十四日(日)　庭そうじ
九月二十三日(祝)～二十六日(金)　彼岸
（二十三日　おかみそり）
九月二十八日(日)　二十八日講総会
女人講